

史跡 桧山城跡Ⅲ

〔居館跡発掘調査概要報告書〕



松山城と城下集落

居館跡

本丸

東御殿

西御殿

二ノ城戸



土器・陶磁器集合写真



金属製品集合写真

序文

柏山城跡は旧北陸道に面する交通の要所に位置し、標高492mの柏山には本丸を中心とした山城跡、山麓には城主の居館跡をはじめとした城下集落が存在します。昭和9年、54年に国の史跡指定を受け、昭和40年代から50年代にかけては山城跡を中心とした発掘調査と保存整備が行われ、町のシンボルとして町民はもとより町外の方にも広く親しまれてきました。

さらなる魅力化を目指し、平成11年度からは居館跡の保存整備に向けた発掘調査を開始しました。本年度までの6次にわたる調査の結果、数多くの遺構が確認され、室町時代における城館の様子が明らかになります。また、国内産の土器・陶磁器のほか、中国から輸入された陶磁器も多数出土しました。その概要をいち早くお伝えしたく、本書の刊行を計画した次第です。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで格段のご指導とご協力を賜りました皆様および関係機関の方々に厚くお礼申し上げますとともに、本書をご高覧いただいた方々に今後ともご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

南越前町教育委員会
教育長 鈴木 和男



整備された二ノ城戸跡

総目次

序文

第Ⅰ章 遺跡の概要	1
第1節 地理的環境	1
第2節 町内の主な遺跡	2
第3節 桧山城跡の概要	4
第4節 過去の調査概要	6
第Ⅱ章 発掘調査の成果	9
第1節 調査に至る経緯	9
第2節 範囲確認調査	10
第3節 内容確認調査	12
第4節 出土遺物	17
第Ⅲ章 まとめ	25
あとがき	28

例言

1. 本書は、福井県南条郡南越前町阿久和・中小屋・社谷地係に所在する国指定史跡桧山城跡居館跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本書は、平成11～18年度に実施した内容確認調査の成果の概略をまとめたものである。
3. 平成13～18年度の調査経費については、国庫および県費の補助金交付を受けた。
4. 調査は、文化庁記念物課、福井県教育庁文化課、史跡桧山城発掘調査整備委員会の指導協力を経て、南越前町教育委員会が主体となって行った。
5. 出土遺物および図面・写真などの調査記録は、南越前町教育委員会が一括して保管している。

図目次

第1図	袖山城跡の位置	1
第2図	町内の主要遺跡分布図	3
第3図	袖山城跡と周辺の遺跡	4
第4図	大正時代に作成した地積図(阿久和)	5
第5図	西御殿礎石建物平面図(1/300)	6
第6図	袖山城跡縄張り図	6
第7図	東御殿礎石建物平面図(1/300)	7
第8図	居館跡試掘調査区位置図	11
第9図	礎石建物(SB1)平面図	13
第10図	SE1平面図(1/20)	14
第11図	SP25平面図・断面図(1/20)	15
第12図	土器溜まり廐棄土坑平面図(1/40)	15
第13図	居館跡遺構配置図	16
第14図	耳皿実測図(1/2)	18
第15図	土師質皿実測図(1/2)	18
第16図	水滴・実測図(原寸)	20
第17図	小型天目茶碗実測図(原寸)	22

表目次

第1表	町内の主要遺跡分布一覧	3
第2表	居館跡1~5次出土遺物組成グラフ	24
第3表	袖山城関連年表	27

写真目次

写真1	東御殿 磂石検出状況	7
写真2	東御殿付近遠景	7
写真3	発掘調査の様子	7
写真4	二ノ城戸発掘調査の様子	8
写真5	飽和宮調査区全景	8
写真6	「一ノ城戸」からみた居館跡	9
写真7	一ノ城戸全景(東から)	10

写真8	一ノ城戸石積み	10
写真9	御屋敷ゾーン19G土坑(SK1)	10
写真10	調査区全景(北から)	12
写真11	門(SI2)	12
写真12	溝(SD10)他	12
写真13	掘立柱建物(SB3)	13
写真14	礎石建物(SB1)	13
写真15	石列(SV7)	14
写真16	石列と土塀(SV4・SA2)	14
写真17	井戸(SE1)	14
写真18	柱穴(SP25半裁)	15
写真19	土器溜まり廐棄土坑	15
写真20	SD11内出土遺物	17
写真21	青磁碗・土師質皿	17
写真22	鉄刀	17
写真23	越前焼・大甕底部	17
写真24	小型天目茶碗(完形)	17
写真25	白磁碗(墨書きあり)	17
写真26	土師質土器集合写真	18
写真27	越前焼・擂鉢	19
写真28	越前焼・大甕(西ノ谷30G出土)	19
写真29	大甕・ヘラ記号	19
写真30	瀬戸美濃焼灰釉・水滴	20
写真31	瀬戸美濃焼集合写真	20
写真32	白磁碗・皿	21
写真33	青磁碗・皿	21
写真34	天目茶碗集合写真	22
写真35	石製品・碁石	23
写真36	銅製品	23
写真37	鉄刀	23
写真38	鉄釘	23
写真39	大甕復元作業の様子	28
写真49	作業員集合写真	28

第1章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

史跡杣山城跡がある南条郡南越前町は福井県のほぼ中央、嶺北地方の南端に位置する。越前市と接する福井平野の南端部、池田町・岐阜県・滋賀県・敦賀市と接する日野川上流の山間部と、越前町・敦賀市と接する日本海沿岸の海岸部からなり、人口は約13,000人、面積は343.84km²と福井県全体の8.2%を占めている。

町の中央を南北に日野川が横断し、上流部の山間地に豊かな森林に恵まれた今庄地区、下流部には南条地区の整備された田園地帯が広がっている。町の西側に位置する河野地区は、暖流と寒流が合流する好漁場である若狭湾に面しており、河野川など複数の河川が日本海へ注いでいる。気候は海岸部と山間部とで大きく異なる。沿岸を洗う海流の影響を受けて比較的温暖で積雪量も少ない海岸部に対し、山間部は県内でも有数の豪雪地帯に数えられる。

第1図 杣山城跡の位置



第2節 町内の主な遺跡

福井県遺跡地図によると、町内には現在66遺跡の存在が確認され、記載されている。時代別にみると、縄文時代5遺跡、弥生～中世1遺跡、奈良時代2遺跡、平安時代5遺跡、平安～中世3遺跡、平安～近世6遺跡、中世21遺跡、中世～近世10遺跡、不明13遺跡である。全体の遺跡数に比べて調査例が少なく、詳細が不明な点も多いが、時代別に簡単に調査結果を述べてみる。

縄文時代の遺跡には上平吹遺跡、久喜遺跡、荒井遺跡、八幡遺跡などがあり、上平吹遺跡と久喜遺跡が発掘調査されている。

【上平吹遺跡（第2図の1）】日野山西麓の緩斜面に位置しており、日野山麓に源を持つ小河川によって形成された小扇状地の扇央地に立地する。北陸自動車道建設に伴い、昭和50年度に発掘調査された縄文時代の遺跡である。遺構は柱穴が3基と石棒が立ったまま検出されたほかは何も検出できなかつたが、遺物については縄文時代中期後葉に位置づけられる縄文土器や石錐・石錘などの石製品が大量に出土している。

【久喜遺跡（第2図の2）】田倉川左岸に位置する、縄文時代の遺跡である。過去の試掘調査により、石組垣跡と縄文土器が確認されている。

弥生時代から古墳時代の遺跡では、鶽物師小坂遺跡の1遺跡が確認されているが、詳細は不明である。

奈良時代の遺跡では、マンダラ寺遺跡、貝谷遺跡があり、マンダラ寺遺跡で発掘調査が行われている。

【マンダラ寺遺跡（第2図の4）】山林の中にある標高400mの高地に位置する奈良・平安時代の山岳寺院跡である。遺跡の実体を把握するための確認調査として、昭和63年度～平成5年度に発掘調査が行われた。遺構は掘立柱建物1棟、溝2条、土坑1基が確認され、須恵器や黒色土器、製塩土器などの遺物が出土している。

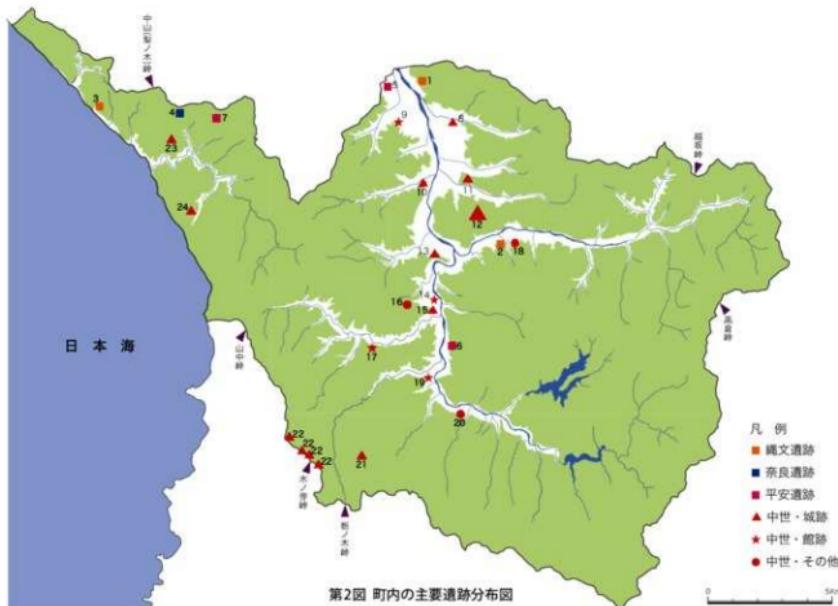
平安時代の遺跡は脇本北遺跡、向合波遺跡、深山遺跡などが存在するが、現在までに脇本北遺跡が発掘調査されている。

【脇本北遺跡（第2図の5）】日野川左岸に位置し、旧北陸道の宿場がおかれた脇本集落を中心分佈している。パイプライン敷設工事、町道拡幅工事に伴い、平成13年度に発掘調査が行われた。遺構は土抗、溝、柱穴を検出しており、平安時代から中世にかけての集落跡と考えられる。遺物は平安時代の須恵器や灰釉陶器など、中世の越前焼、瀬戸美濃焼、輸入陶磁器などが混在して出土している。

中世の遺跡については、21遺跡の存在が確認されており、その内訳は城跡・館跡12遺跡、集落1遺跡、墓地1遺跡、その他2遺跡である。うち発掘調査が行われたのは袖山城跡を除いては木ノ芽峠城塞群において試掘調査が行われている。

【木ノ芽峠城塞群（第2図の22）】敦賀との境である木ノ芽峠一帯の山頂毛根筋に存在する。木ノ芽峠城、鉢伏城、觀音丸城、西光寺丸城の4城があり、現在確できる遺構は戦国期のものである。平成3年度に五百余年続く峠の茶屋・前川家の解体復元に伴い、試掘調査が行われた。遺構は確認されていないが、焼土面が2層確認されており、一向一揆勢と織田信長軍との合戦をはじめとした戦争による火災が生じていることが明らかとなった。遺物は若干数の陶磁器類や錢貨が出土している。

その他の中世遺跡については未調査であるため詳細は明らかではない。しかし、袖山城の出城とされる黒山城・茶臼山城・八王子城には堀切や堅堀が残り、『源平盛衰記』及び『平家物語』に記された、平家一門と木曾義仲との戦いの舞台となつたとされる燧ヶ城にも堀切や石垣が残る。



第2図 町内の主要遺跡分布図

第2図 町内の主要遺跡分布図

第1表 町内の主な遺跡分布一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	種別	現況	備考
1	上平吹遺跡	南越前町上平吹	縄文	集落跡	水田・宅地	昭和49~50年度 調査
2	久喜遺跡	南越前町久喜	縄文	集落跡	畠地	
3	下長谷洞穴遺跡	南越前町甲斐城	縄文	洞窟	洞穴	
4	マンダラ寺遺跡	南越前町河野	奈良	寺院跡	山林	昭和63年~平成5年度 調査
5	脇本北遺跡	南越前町脇本	平安	散布地	水田・宅地	平成13年度 調査
6	向合波遺跡	南越前町向波	平安	散布地	水田	
7	深山遺跡	南越前町河野	平安	散布地	山林	
8	黒山城	南越前町跡物師・上野	中世	城跡	山林	
9	瓜生城	南越前町西大道	中世	館跡	水田	
10	茶臼山城	南越前町別所	中世	城跡	山林	
11	八王子城	南越前町阿久和	中世	城跡	山林	
12	袖山城	南越前町阿久和・中小屋	中世	城跡・館跡	山林	昭和47~52年度 山城調査 平成14年度~ 居館跡調査
13	湯尾城	南越前町湯尾	中世	城跡	山林	
14	赤座備後守治館	南越前町今庄	中世	館跡	水田	
15	辻ヶ城跡	南越前町今庄	中世	城跡	山林	
16	堂谷院遺跡	南越前町今庄	中世	寺院跡?	山林	
17	赤座久兵衛館	南越前町上新道	中世	館跡	水田	
18	久喜中世墓	南越前町久喜	中世	墓地	山林	
19	荒井館	南越前町荒井	中世	館跡	山林	
20	八幡砦跡	南越前町八幡	中世	砦跡?	山林	
21	虎杖城	南越前町板取	中世	城跡	山林	
22	木ノ芽姫城塞群	南越前町木ノ芽姫	中世	城跡		"平成3年度 試掘調査 鉢伏城跡・親善寺丸城跡・木ノ芽姫城跡・ 西光寺丸城跡の4城"
23	新城	南越前町河野	中世	城跡	山林	
24	太良城	南越前町太良	中世	城跡	山林	

第3節 柚山城跡の概要

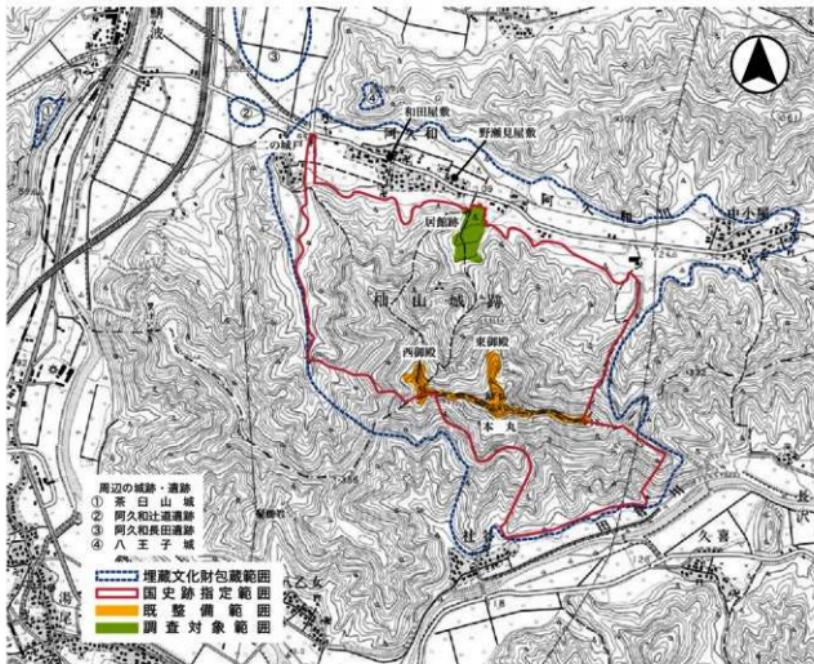
柚山城の歴史

柚山城は、中世の荘園「柚山庄」に立地する城である。「柚山庄」の名は鎌倉時代の古文書に見える。後鳥羽上皇の生母七条院の所領で、安貞2年（1228）8月上皇の後宮の修明門院に譲られた。その後、大覺寺統に伝えられた。この「柚山庄」は、公家領荘園として中世を通じて公家関係者が知行した。南北朝期の応安7年（1374）11月中御門方に「柚山庄内阿久和・柚尾・宅良村井是恒以下名々」の知行が安堵されており、戦国期も中御門家が知行した。この

ように「柚山庄」は柚山城の周囲の村々を含む大規模な荘園だったことがわかる。

柚山城は、鎌倉時代末期、瓜生保の父、衡が越後の三島郡瓜生村からこの地に移り築城したといわれる。以来、金ヶ崎・鉢伏・木ノ芽岬・燧などの諸城とともに越前の玄関口をおさえる要衝となつた。『太平記』巻17～19には、柚山城に拠つた瓜生一族の記事が数多く見られる。

延元元年（1336）新田義貞が恒良・尊良両親王を奉じて金ヶ崎城に入ると、瓜生一族は金ヶ崎城を援護した。『太平記』によれば、延元2年（1337）正月11日、金ヶ崎城を救うた



第3図 柚山城跡と周辺の遺跡

め出兵した瓜生保は、敦賀市裡曲付近で戦死したといわれている。『得江頼員軍忠状』によれば暦応4年（1341）6月25日夜、袖山城が落城している。その後、足利（斯波）高経が在城したが、貞治6年（1337）7月高経は袖山城で病没した。ついで、斯波氏の家老で越前国守護代を歴任した甲斐氏が拠って朝倉氏と対峙したが、文明6年（1474）正月日野川の合戦に敗れ落城した。朝倉氏の時代には、その家臣・河合安芸守宗清が在城したが、天正元年（1573）織田信長の北陸攻めにより廃城となった。その後、天正2年（1574）には一向一揆が袖山に拠ったとされるが、詳細は不明である。

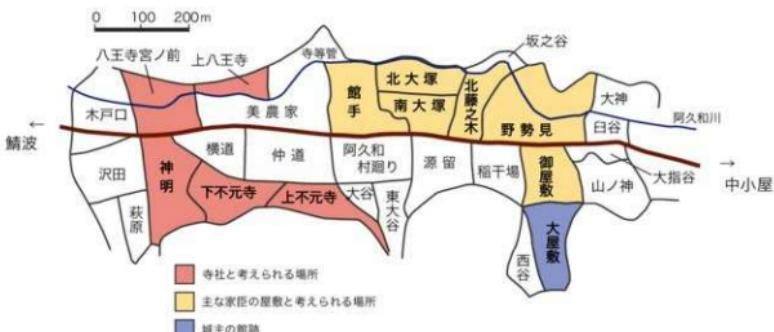
袖山城の概要

袖山城は南越盆地の南端、日野川の狭い谷に南条山地の山が迫り、北陸道が通過する交通の要所に位置している。日野川の東岸に阿久和谷と宅良谷に挟まれて袖山があり、その珪岩の山

容は陥しく天險の地である。袖山山頂には山城が存在し、標高492mの「本丸」を中心として東西に「東御殿・西御殿」と呼ばれる曲輪が築かれている。

山麓の阿久和谷は幅約500m、奥行約4kmの小溪谷で、谷の入口は「二ノ城戸」と呼ばれる土壠と堀が内外を画している。谷の中央には「百間馬場」と通称される幹道が走っている。その両側には武家屋敷があったといわれ、土壠の一部が残って残っており、さらには城主の館とされる「居館跡」に「一ノ城戸」と呼ばれる土壠や屋敷地と思われる平坦面が存在する。

これらの現存する土壠や地割をもとに地積図を見てみると、「木戸口・神明・宮ノ前・不元寺・館手・大屋敷」等の字名が残っており、袖山山麓にはかなりの規模の集落が形成されていたことがうかがえる。一方、城戸の外には「八分市・鉢町」の字名や「辻道」の呼称が指摘されており、市の存在が推定される。また、袖山城の出城として「八王子城・茶臼山城・黒山城」が知られている。



第4図 大正時代に作成した地積図(阿久和)

第4節 過去の調査概要

袖山城は、昭和19年と昭和54年に国史跡の指定を受けており、山城が存在する袖山（城山）と山麓城下の一部がその範囲に含まれる。良好に残された歴史環境とそれを育んだ豊かな自然環境を後世に継承するため、これまで幾多の努力が払われている。

ここでは、昭和45年から56年にかけ朝倉氏遺跡調査研究所の指導のもと実施された山城跡及び城下の二ノ城戸跡、飽和宮跡の発掘調査について説明する。

西御殿

西御殿と称する本丸の西尾根には、大小あわせて17の平坦面が存在する。そのうち何らかの遺構が検出されたのは、5ヶ所のみである。いずれの平坦面でも礎石と思われる石を検出しているが、木の根等により破壊されている部分が多く、建物の規模や性格が判明するには至っていない。建物遺構では、他に西御殿及びその周辺部で約10m四方の広さがある一番高い平坦面で、東西約3.0m、南北約2.4mの方形建物と推定される遺構が検出されている。これは位置・規模等からみて櫓の様な機能を持つ建物と考えられる。また、上部はほとんど崩れていたが、10段前後とみられる階段遺構が検出されている。遺物については、越前焼が42点出土している。



第5図 西御殿礎石建物平面図(1/300)



第6図 袖山城跡縄張り図



東御殿

東御殿は、南北に長い約600m程の不整形な平坦面で、山城部分に残る平坦面の中ではもっとも広いものである。この部分では、計30数個の礎石を検出しており、石材はすべてこの付近に産する珪石を用いている。

この30数個の礎石は、方位・間隔から二群3棟の建物に分けられる。この二群のあいだの方位差は約4°であり、時期的な差とみるのが自然であろう。また、礎石レベルの差も認められるが、これは地形上の制約とみて良いと思われる。遺物については、越前焼20点、土師器297点、瀬戸美濃焼6点、染付2点、金属製品2点、石製品5点が出土している。いずれも13世紀末から16世紀後半にかけての年代である。



二ノ城戸跡



写真4 二ノ城戸発掘作業の様子

袖山城の入り口である城戸の土塁とその外濠は北側半分は姿を留めていないが、南側半分、特に山裾に近い部分ではほぼ原形を保っている。そこで、土地改良事業の範囲より除外するため、外濠の位置を確認するための調査を行った。

調査区は3ヶ所に2×3m、2×5mのトレンチを設定し、外濠の肩部をとらえることを目的とした。調査の結果、トレンチ1、2において地山を切り込む外濠の肩部を確認し、トレンチ3で石組溝が検出された。これは城戸口に関連する遺構と推定される。ここで確認された外濠の肩の位置は、土地改良前の水田地割や南山裾の土塁、外濠の延長線とよく一致している。

こうした結果をふまえ、現在は外濠部分が土地改良事業から除外、昭和54年に国指定史跡として追加指定され、整備保存されている。

伝飽和宮跡

阿久和谷の中の平坦部は、以前より遺物が採集されており、かなりの遺構の存在が予測されていた。そうした状況の中で、飽和宮跡及び城戸を含む一帯の土地改良事業が計画され、関係者が協議の結果、昭和52年度に国庫補助金を経て、発掘調査を行うことに決定した。

調査区は、幅3mのトレンチを東西、南北にそれぞれ2本ずつ設定し、面積にして700m²の発掘調査を行った。その結果、素堀溝、石組溝、井戸、通路状遺構、礎石建物等を検出したが、遺構の残存状況はあまり良くなく、建物の規模などは判明しなかった。また、直接的に飽和宮の存在をを証明する遺構も検出されなかった。

出土した遺物は、越前焼などの陶磁器類が主で、これに木製品類や石製品類が少量加わる。陶磁器類では越前焼、土師質皿、瀬戸美濃焼、青磁、白磁等で総数716点が出土している。そのうち6点は10世紀頃のものと推定される須恵質の陶片であり、土師質皿70点、越前焼5点、有田焼かもしくは三川内焼11点が近世のものと考えられるが、その他は13世紀末～15世紀中葉のころのものである。

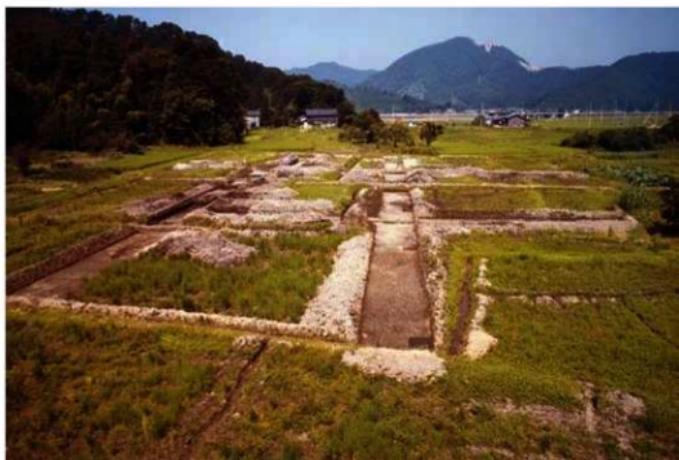


写真5 飽和宮調査区全景

第Ⅱ章 発掘調査の成果

第1節 調査に至る経緯

居館跡は、阿久和谷にある幅約100m、奥行き約300mの支谷に築かれている。谷の開口部には「一ノ城戸」と呼ばれる幅約100m、高さ3mを測る土壁と堀が存在し、谷の内外を区画している。谷内には「大屋敷」の字名が残り、居住空間を確保するために斜面を削平・盛土するなどして広い平坦面を造成した様子がうかがえる。この平坦面から山際までは、緩やかな緩斜面が続くが、そこにも小さな平坦面がみられる。また、土壁の外側にも「御屋敷」の字名が残っており、複郭あるいは郭外の居住空間であった可能性も考えられる。

前章で述べたとおり、袖山城における発掘調査

は、昭和45年から56年にかけ袖山山頂の山城部分と城下部分の一部において実施されている。その後、調査事業は一時中断していたが、町のシンボルとしてのさらなる魅力化を目指すため、城下部分でも特に学術調査価値の高い居館跡の調査に着手することとなった。居館跡の指定面積は、約3haという広大な規模であり、これまでの史跡指定のさいも調査されていないため、まず平成11年度～13年度にかけて範囲確認調査を行い、その成果に基づく第1期の内容確認調査を平成14年度～18年度の5ヶ年にわたり実施した。



写真6 「一ノ城戸」から見た居館跡

第2節 範囲確認調査

居館跡の試掘調査は、平成11年度～13年度にかけて、土地の買い上げ事業と同時に進行で行なわれた。植林されていた杉の木の伐採が終わった箇所から順次調査を開始し、3m×3mのグリッドとトレンチを基本として、現況の地形や調査の進捗により任意で設定した合計60ヶ所、面積にして約1,000m²を調査区とした(第8図参照)。

大屋敷ゾーンは、土塁から南側の調査区で、土塁部分といくつかの平坦面にわけられる。

土塁は、中央部分を基点として「ハ」の字状に開いている。土塁の両端は後世の削平により開口しており、中央部分に道路上の窪みがある。また、中央部分より東側にかけて土塁の外側で石が露出しており、石積みであることをTTで確認している。石積みは横長の割石を野面積みで積んでおり、およそ5段分が残存している。石積みの下では、明確ではないものの犬走り状の平坦面を6T・7Tの断面で確認できる。土塁の中央部分から東側の部分にかけては石積みが確認されず、8T断面の上層から15世紀前半以降に造られたものであることを確認している。

平坦面の1Gで礎石建物・石列遺構・溝を検出したほか、遺物として土師質皿・越前焼・瀬戸美濃焼・青磁・白磁など15世紀前半の土器・陶器の破片が大量に出土している。4G・5Gでも、明確な遺構は確認していないが、IGと同様の遺物が出土している。

御屋敷ゾーンは土塁から北側の調査区で、すでに過去に土地改良事業が行われていることから、場所によっては客土・礫層・砂利層が堆積する。14G・19Gでは、約15cm下がったところで土坑・石列・溝などの遺構を確認し、覆土からは越前焼・瀬戸美濃焼・青磁の破片など中世の遺物が出土している。しかし、その他の調査区では表土から遺物が若干出土するものの遺構は確認されなかった。16G・17Gにおいては、約120cm下がったところで遺構の存在する面を確認している。

西ノ谷ゾーンでは、大屋敷ゾーンとは約2mの段差があり、狭い平坦面と緩斜面に分けられる。平

坦面には地表面下約20～30cmに遺物包含層が存在し、大屋敷ゾーン同様の土師質皿・越前焼・瀬戸美濃焼・青磁・白磁・天目茶碗などの破片が出土している。緩斜面は、30G周辺で礎石を検出しておらず、表土から遺構面にかけて大量の越前焼(主に大皿)の破片が出土していることから、倉庫などの建物が建てられていた可能性が考えられる。



写真7 一ノ城戸全景(東から)



写真8 一ノ城戸 石積み



写真9 御屋敷ゾーン19G 土坑 (SK1)



第8図 桂山城跡居館跡範囲確認調査区位置図

第3節 内容確認調査

概要

「大屋敷」ゾーンにおいては、居住空間を確保するために、南側の斜面を削平して北側を盛土するなどして広い平坦面を造成したようである。屋敷地内では、試掘調査及び本調査において複数の遺構面を確認している。平坦面を造成した時期を境に遺構の様相が変わり、建物は掘立柱建物から礎石建物へと移行し、それに伴う素堀溝、石列、石組みの井戸、素堀の井戸などを検出している。

本調査は、保存目的の内容確認であるため、礎石建物が存在する上層遺構の検出を主眼に調査を行っているが、後世の削平等により上層面が存在しない一部では掘立柱建物が存在する下層遺構も確認している。

検出遺構

【門】6尺4寸の間隔において、長辺約30cmの礎石を2つ検出しており、礎石建物に伴う門であると考えられる。「一ノ城戸」の土壘に設けられた虎口の延長上で、屋敷地の前面に位置し、館をめぐる石列や土塀とも方位が一致する。石材は川原石が使われている。残念ながら虎口から門までのあいだの通路状遺構は、未調査の部分もあって確認されていない。

【溝】建物区画と思われる排水の溝及び建物の雨落ち溝の遠景である。写真22の中央に流れのがSD10であり、南側斜面からこのSD10に流れ込む細い溝が2条確認されている。その後SD10は屋敷地西側から流れる溝と合流し、門跡東側より屋敷地外へ排水されている。遺物も土師質皿の破片を中心、越前焼や鉄釘などが出土している。



写真10 調査区全景(北から)



写真11 門(SI2)



写真12 溝(SD10他)



写真13 挖立柱建物 (SB3)

[掘立柱建物] 後世の削平等により、上層の遺構面が存在しない下段部分で検出されたため、建物の性格や規模などは不明である。確認された6基の柱穴は、いずれも直径が約1m、深さが約60cm程度のものである。柱痕は残存していないかった。遺構に伴う遺物もほとんど出土していない。

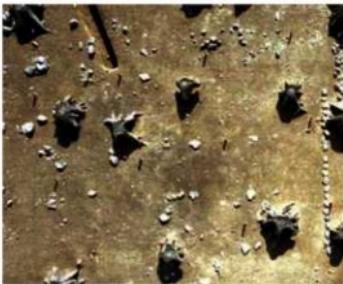
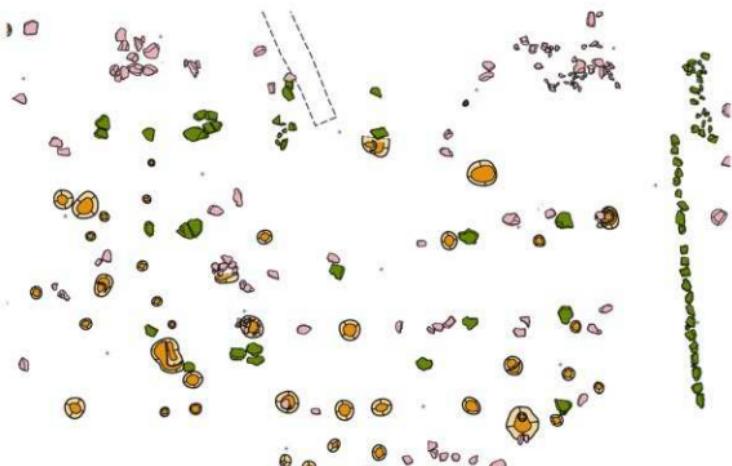


写真14 磐石建物 (SB1)

[磐石建物] 磐石の石材には、山の珪石と、一部で川原石を使用している。大きさは、戦国期のものと比べると全体的に小さく、間尺は1間間隔のものが多い。一部の磐石上面には、柱位置を決める「井」・「十」字状の線刻が見られる。なお、SB1以外にも複数の建物を確認しているが、方位や柱間寸法に違いがみられることから、建て替えや増築などが行われた可能性が考えられる。



第9図 磐石建物 (SB1) 平面図

【石列】この石列の内側で建物の礎石が検出され、大量の遺物が出土していることから、居住区域を区画するための石列と考えられる。居館跡で検出された石列には、不整形な礎を並べただけのものと面をあわせて整然と並べられたものとにわけられるが、このSV7は後者に区分される石列である。



写真15 石列 (SV7)

【井戸】径は長軸1.4m、短軸1.2mの円筒形をした石組みの井戸である。内部からは礎が大量に検出されており（第10図参照）、館が廃棄されたとともに意図的に埋められたものと考えられる。写真27は礎を取り除いた後の状況であるが、現在も井戸としての機能を失っておらず、水が大量にわき出てくるため完掘を断念した。そのため深さは不明である。



写真17 井戸 (SE1)

【土壙】約30cmの土壙状の盛土が施され、その上に基礎となる石列を配置している。石列には面をあわせた並びが見られ、門の礎石の西側から屋敷を囲むようにして延びている。屋敷地の西側部分が後世の削平により失われているが、南側にかけて延びているのが確認されている。門礎石の東側調査区については後世の削平により失われてしまった可能性が高く、現在のところ確認されていない。



写真16 石列と土壙 (SV4・SA2)

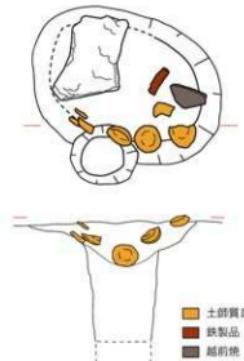


第10図 SE1平面図 (1/20)



写真18 柱穴 (SP25)

【柱穴】屋敷地の中心部で検出された柱穴のひとつである。写真の左上に見えるのは礎石であり、礎石のすぐ横から検出された。そのため、据立柱建物の柱穴を埋め立てて礎石建物を建てた経緯が推測される。出土した完形の土師質皿は、礎石建物の地鎮のために埋められたものであろうか。

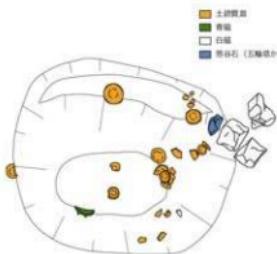


第11図 SP25平面図・断面図(1/100)



写真19 土器溜まり廃棄土坑

【土器溜まり廃棄土坑】礎石建物の北側で検出された擂鉢状の土坑である。中からは数点の陶磁器片を含む大量の土師質皿の破片が出土している。そのため、使用済みの不要な土師質皿を廃棄した土坑ではないかと考えられる。



第12図 土器溜まり廃棄土坑平面図(1/40)



第13圖 居館跡遺構配置圖

第4節 出土遺物

範囲確認調査から内容確認調査にかけて出土した遺物は、総数約140,000点を数える（第4表参照）。種別では土師質土器の出土が多く、皿だけで全体の9割以上を占める。次いで越前焼が多く、壺・甕・擂鉢などの日常雑器類はほとんど地元産の越前焼でまかなわれており、珠洲焼や常滑焼など他の地域で生産されたものはみられない。壺・擂鉢に対し甕の出土数が多いのが目立つが、個体の大きさの差を考えれば当然の結果といえよう。そのほか瀬戸美濃焼などの国産陶磁器や青磁・白磁などの輸入陶磁器、少量の瓦質土器が出土している。白磁碗では外面底部高台部分に墨書がみられるものもある。土器・陶磁器以外では、砥石・碁石などの石製品、鉄刀・刀子・小札・釘などの鉄製品や数点ではあるが銅製品、錢貨・木製品、

漆器なども出土している。

土師質皿は完形での出土も多いが、その他の土器・陶磁器は破片での出土である。後世、烟や水田などを行っていた経緯もあり、同一個体であっても出土地点は離れている場合が多い。

輸入陶磁器にいくつかの伝世品が見られるほかは、全体的に4世紀末～15世紀後半までの比較的まとまった年代の組み合わせである。なお、中世の土器・陶磁器以外でも、縄文土器片27点、弥生土器片1点、須恵器片18点、染付片69点、近世陶磁器片39点、石製品・石礫1点が出土している。

現在まだ整理作業中であるため、本書では完形または復元作業までが終了した遺物を中心に掲載している。

遺物の出土状況



写真20 SD11内出土遺物



写真21 青磁碗・土師質皿



写真22 鉄刀



写真23 越前焼・大甕底部



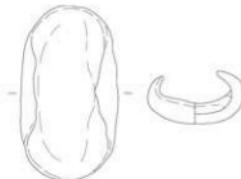
写真24 小型天目茶碗(完形)



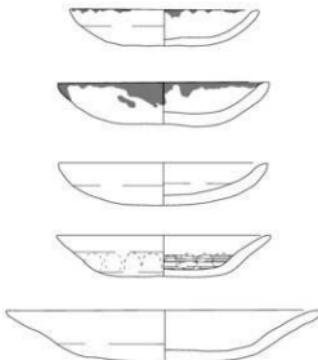
写真25 白磁碗(墨書あり)

土師質土器

土師質土器は、皿が主体を占める。すべて手づくね成形されており、ロクロ成形のものはみられない。外面に横ナデ痕が残るものや内面に指頭圧痕が残るものもあり、口縁部に煤が付着した皿は灯明皿として使用されたものと考えられる。特殊なものとしては、耳皿やヘソ皿のほか灯明皿を乗せて使用されたと思われる灯明台の破片が少量みられる。そのほか底部に直径2mmほどの穴を2ヶ所に穿った小皿が1点出土している。



第14図 耳皿実測図 (1/2)



第15図 土師質皿実測図 (1/2)

写真26 土師質土器集合写真



越前焼

越前焼は、中世の六古窯のひとつに数えられ、福井県丹生郡越前町の織田・宮崎地区で12世紀頃から現在まで生産が続けられている壺器系の陶器である。越前焼の焼成品は、鎌倉時代にわずかながら三筋壺・瓶子・経筒・水瓶などの宗教用具を生産しているが、壺・甕・擂鉢の三器種にはほぼ限定されている。仙山城跡居館跡において出土する越前焼もほとんどがこの三器種であり、破片で大甕・甕1,964点、擂鉢・鉢170点、壺11点の出土があり、他の器種は現在のところ確認されていない。

写真27の擂鉢は、2のみ西ノ谷ゾーン30G出土、その他はすべて大屋敷ゾーンの屋敷地内から出土したものである。どの擂鉢も擂り目がわからないほど摩耗しており、よく使い込まれた様子がうか



写真27 越前焼・擂鉢

がえる。1、2ともに口縁に沈線がめぐり、1のみ片口を有す。1は口径34.8cm、器高11.8cm、底径13.2cmを測り、擦り目1単位12条を数える。2は口径33.4cm、器高9.5cm、底径15.0cmを測り、擦り目1単位6条を数える。

写真28は西ノ谷ゾーン30G出土の大甕である。口径71.0cm、肩回り264.3cm、器高75.3cm、底径23.7cmを測る。30Gではこの大甕の他に少なくともあと3個体確認されており、建物礎石も検出されていることから、倉庫などの建物の中で水甕、もしくは穀物などの貯蔵の甕として使用されたものと考えられる。大屋敷ゾーンの屋敷地内からも、少なくとも2個体の大甕が出土している。いずれも口縁部の形態から14世紀末から15世紀前半のものであると考えられる。壺については、若干数の破片が出土するのみである。

この甕にはヘラで「大」「」という記号が刻まれている。このほか、格子目状や「本」の押印と呼ばれるスタンプ紋が押されている甕も出土!



写真28 越前焼・大甕 (西ノ谷30G出土)



写真39 大甕・ヘラ記号

瀬戸美濃焼

瀬戸美濃焼は、若干数の無釉陶器が確認されているが、ほとんどが施釉陶器である。特に灰釉陶器の出土数が多く、器種も深皿、大皿、小皿、鉢し皿、瓶子、香炉など多岐にわたる。鉄釉陶器では天目茶碗が主体を占めるが、皿や茶壺、瓶なども少量ではあるが出土している。

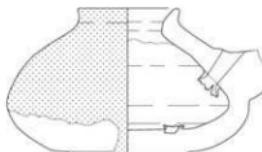
写真30は灰釉の水滴である。口径2.0cm、器高3.0cm、底径2.4cmを測る。外面に緑灰色の釉薬がかかり、口縁部には焼成のときにできたと思われる小さな亀裂がある。内面底部には小さな穴があり、注口の延長上であることから、注口は外側から細い串などで突いて開けられたことが推測できる。

写真31は鉢し皿3点、灰釉皿1点、鉄釉皿1点の集合写真である。1・3は灰釉鉢し皿、2のみ無釉の鉢し皿である。口径は14.8~15.0cm、器高2.8~2.9cm、底径6.0~6.5cmを測る。底部は3点すべてにおいてロクロ成形の回転糸切りで仕上げられており、外側面にはナデ痕が残る。鉢し目には使用痕がまったく認められない。

4は灰釉の小皿である。口径11.5cm、器高2.5cm、底径4.4cmを測る。5は鉄釉の小皿である。口径9.6cm、器高2.2cm、底径5.1cmを測る。4・5ともに釉薬は口縁部のみに施されており、底部には回転糸切り痕が残る。



写真30 瀬戸美濃焼灰釉 水滴



第16図 水滴・実測図 (原寸)



写真31 瀬戸美濃焼集合写真



輸入陶磁器（青磁・白磁）

中国からの輸入陶磁器においては、白磁170点、青磁397点が出土している。いずれも完形での出土ではなく、破片での出土である。

白磁の器種は、碗、皿、杯、多角杯、水注、紅皿が出土しているが、皿が主体を占める。

写真32の1～3は白磁の小鉢である。口径7.4～8.0cm、器高3.2～3.6cm、底径3.0～3.5cmを測る。2のみ乳白色、1・3は黄白色の釉薬がかかる。高台は削りだし高台である。4～6は白磁の皿である。口径9.5～10.6cm、器高1.9～2.9cm、底径3.4～4.3cmを測る。外側ともにロクロナデ調整を施し、黄白色的釉薬がかかる。6のみ御屋敷ゾーン19G出土、その他は大屋敷ゾーンの屋敷地内の出土である。

青磁の器種は碗が主体を占める。他には杯や盤、少量はあるが、香炉などの破片も確認されている。碗については、外側に雷文帯や蓮弁などの文様を持つものや、内面底部に草花文の印刻を持つものも出土している。

写真33の7は龍泉窯系の無文の青磁碗である。口径11.8cm、器高4.0cm、底径5.7cmを測る。淡い緑黄色の釉薬が厚くかかり、内面底部に円状の釉剥ぎがみられる。8は龍泉窯系の青磁杯である。口径11.4cm、器高3.4cm、底径5.2cmを測る。淡い灰緑色の釉薬が施され、内面底部と高台脛付に釉剥ぎが見られる。口縁部は外反している。9は龍泉窯系の青磁杯である。口径14.0cm、器高3.8cm、底径7.8cmを測る。前面に淡い緑黄色の釉薬が施され、内面底部に蛇目釉剥ぎがみられる。外側底部の高台脣付にも蛇目釉剥ぎがみられ、回転ヘラ削り痕が残る。すべて大屋敷ゾーンの屋敷地内での出土である。

写真32 白磁碗・皿



写真33 青磁碗・皿

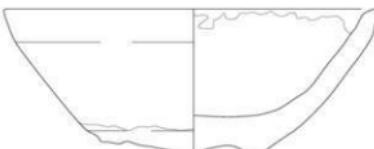
天目茶碗

天目茶碗には、中国から輸入されたものと国内で生産された瀬戸美濃製のものがある。破片数からみると中国製32点、瀬戸美濃製49点であり、瀬戸美濃製のほうが若干多く出土している（第4表参照）。

写真34は茶道具の集合写真であり、1～4は天目茶碗である。口径1.10～12.4cm、器高4.7～6.4cm、底径3.4～5.2cmを測る。すべての碗において口縁端部は屈曲し、高台は削りだし高台である。2は瀬戸美濃製、1・3・4は中国製と思われるが、確定するにはさらなる検討が必要である。

5は瀬戸美濃焼鉄軸の天目台である。長い間土中にあって、^{酸漿}・羽の部分は失われており、高台部分のみが残る。天目台の出土は現在のところこの1点だけである。

6は瀬戸美濃製の小型天目茶碗である。外面は鉄軸、内面は灰釉が施されている。口径7.3cm、器高2.9cm、底径3.4cmを測る。削りだし高台であるが、造りは荒く雑である。



第17図 小型天目茶碗実測図(原寸)



写真34 天目茶碗集合写真



写真35 石製品 基石

石製品

石製品については、写真35のように碁石が14点出土している。形は不整形であり、正円になるものはないが、表面は非常に丁寧に磨かれている。黒石または白石とはっきり色が識別できるものは少ない。

また、碁石以外にも砥石、擦り石などが若干出土している。

金属製品

写真36は用途不明の銅製品である。銅製品の出土は写真の3点と、数点の錢貨がある。

写真37は鉄刀、写真38は鉄釘である。金属製品では、圧倒的に鉄釘の出土が多い。特に礎石建物（SB1）の推定範囲内での出土が目立つ。



写真36 銅製品

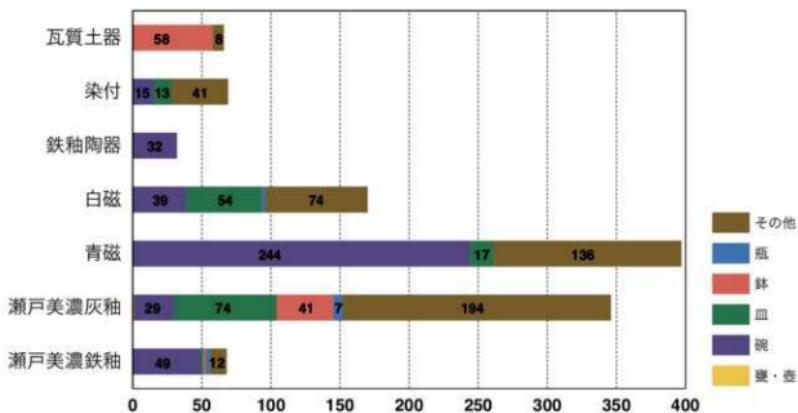
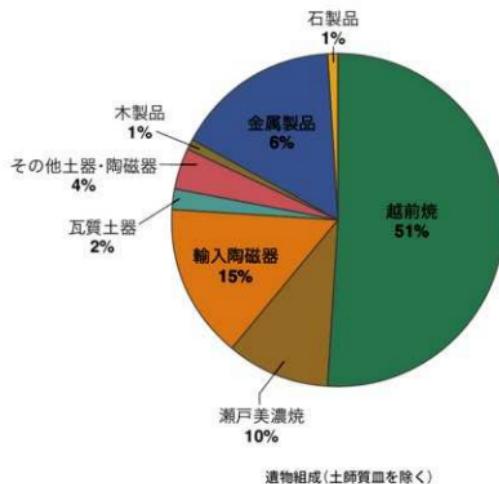


写真37 鉄刀



写真38 鉄釘

第2表 居館跡1~5次遺物組成表



第Ⅲ章 まとめ

居館跡の発掘調査は、範囲確認調査と内容確認調査を併せ8年間という長期にわたって行われてきた。範囲確認調査では、大屋敷・御屋敷・西ノ谷の各ゾーンあわせて60ヶ所のグリッド及びトレンド調査を行い、内容確認調査は、範囲確認調査の結果から屋敷地であると推定された大屋敷ゾーンの一番広い平坦面の調査が主に行われた。その結果、多数の遺構や遺物が確認されたが、もう一度あらためてまとめてみたい。

遺構については、礎石建物・門・塀・石列・石組み井戸・素堀溝などが検出された。礎石建物は複数棟確認できるが、方位が若干ずれていることから、建て替えや増築がなされた可能性が推測できる。加えて柱穴も多数検出されており、掘立柱建物から礎石建物へ変わる転換期の様相が見て取れる。

「一ノ城戸」の土塁の虎口から南側の延長上に門があり、門から西側に向かって土塀と石列が延びている。東側については、後世の削平により残っていないが、南側の斜面際にも石列が検出されていることから、屋敷地内を囲むようにして延びていた可能性も考えられる。屋敷地内を囲むように延びた石列の内側に礎石建物が存在し、東側に石組みの井戸が検出されている。このように、発掘調査の結果、屋敷地内の構造が徐々に明らかになってきた。本調査は保存目的のため礎石建物が残る上層遺構の検出を主眼において行ってきた

が、後世の削平等により上層遺構が存在しない場所では一部掘立柱建物などの下層遺構も検出している。

また、西ノ谷ゾーンの30Gにおいても礎石建物が検出されており、この周辺から貯蔵用の越前焼・大甕の破片が大量に出土していることから、倉庫などの建物の存在が推測できる。御屋敷ゾーンでも土坑や柱穴が検出されている。

遺物については、試掘調査・本調査併せて約140,000点が出土している。その9割以上が土師質皿であり、大小の皿のはか主に口縁部に煤が残る灯明皿や耳皿・ヘソ皿などが確認されている。残り1割弱の中に越前焼・瀬戸美濃焼・青磁・白磁などの輸入陶磁器、瓦質土器、鉄製品、石製品などが含まれ、そのうち越前焼については屋敷地内よりも範囲確認調査が行われた西ノ谷ゾーン30Gで多く出土している。その他の遺物はほとんどが屋敷地内からの出土であった。

遺物の年代については、輸入陶磁器に若干の伝世品がみられるほかは、おおむね14世紀末～15世紀後半までのまとまった年代の組み合わせである。土器溜まり廐窓土坑や素堀の溝内から一括して出土した遺物もあり、館の存続時期を考える上でも貴重な資料となると考えられる。しかしながら、現在も整理作業中であるため、今後十分に検討する必要がある。

引用・参考文献

- 青木豊昭 2005 『今庄町内の縄文時代の遺跡と遺物』 文協第26号 今庄町文化協議会
今庄町誌編さん委員会 1979 『今庄町誌』 今庄町
河野村誌編さん委員会 1984 『河野村誌』 河野村
田中照久他 1994 『越前古陶とその再現 一九右衛門窯の記録一』 出光美術館
中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
南条町教育委員会 1972 『史跡 桧山城跡と瓜生保』
南条町教育委員会 1978 『史跡 桧山城跡I -昭和47年度～52年度発掘調査・整備事業概報-』
南条町教育委員会 1978 『史跡 桧山城跡II -伝飽和宮跡・外濠確認発掘調査報告-』
南条町誌編纂委員会 1976 『南条町誌』 南条町
仁科 章 2005 『マンダラ寺遺跡』 南越前町埋蔵文化財調査報告第1集 南越前町教育委員会
福井県教育委員会 1976 『上平吹遺跡』 北陸自動車道関係遺跡調査報告書第12集
福井県教育委員会 1993 『福井県遺跡地図』
福井県教育庁 埋蔵文化財調査センター 1999 『西山窯跡群』 福井県埋蔵文化財調査報告第45集
藤澤良祐 2005 『瀬戸窯跡群 歴史を刻む日本の代表的窯跡群』
北陸中世考古学研究会 2006 『中世北陸の茶道具』 第18回北陸中世考古学研究会資料集
北陸中世考古学研究会 2006 『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』
第19回北陸中世考古学研究会資料集
北陸中世土器研究会 1992 『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』 第5回北陸中世土器研究会
吉岡康暢他 1998 『陶磁器の文化史』 国立歴史民俗博物館

第3表 桧山城関連年表

元号(南朝/北朝)	西暦	城主	ことがら
			往昔、北の比叡山と称されていた。 一条天皇の御代、源頼親が寺基を中心として桜山の地を築いたと伝えられている。
建久2年	1192		源頼朝が征夷大將軍となる。
承久3年	1221		承久の乱
安貞2年	1228		高倉天皇(1169~1180)の妃・七条院の領地だったことが8月の「御处分状」に見られる。 この年、後鳥羽上皇の後宮・修明門院に譲られた。
元亨元年	1321		この頃、瓜生衡、一族を率いて桜山に来たりて城郭を築く。
元弘3年/正慶2年	1333		建武の新政
延元元年/建武3年	1336	瓜生氏	南北朝に分かれて対立する。 駿河義助、敦賀の金ヶ崎城より援軍を求めて桜山に来る。 新田義貞、義助兵千騎を附して金ヶ崎城脱出、桜山に入城。 桜山城の南朝軍、金ヶ崎城包围を攻撃するも、金ヶ崎城陥落。 府中の斯波高経の軍勢と桜山城の駿河義助の軍勢が、大塙松崎辺りでたたかひ合戦する。 新田義治を将として飽和宮前に大中黒の旗を挙げ、義兵をあつむ。 瓜生保、高師泰と湯尾にて戦い大勝、斯波高経を新善光寺城に攻め落とす。
延元2年/建武4年	1337		金ヶ崎救援に向かい、櫻曲にて大敗、保・義鑑討死。 新田義貞・義助、桜山に撤退。
延元3年/暦応元年	1338		足利尊氏が征夷大將軍となる。 駿河宿に偵察に出た義助の軍を細川出羽守が攻撃し、合戦となる。 義貞、桜山にて再拠兵。
興国2年/暦応4年	1341	斯波氏	義貞、吉田藤島において斯波高経の配下の兵と遭遇し、討死。 駿河、脇本、大塙で合戦。 桜山落城。斯波高経、桜山城主となる。
正平21年/貞治5年	1366		高経、室町幕府と対立。高経は越前に逃げ下り、桜山城に拠る。幕府軍、桜山を攻める。
正平22年/貞治6年	1367		高経、室町幕府と交戦中、桜山城にて病死。
文永2年/応安7年	1374		桜山庄・阿久和、袖尾、宅良などの村が輪旨により中御門方に安堵される。
元中9年/明徳3年	1392		南北朝の統一
寛正6年	1465	甲斐氏	増澤甲斐守祐徳、桜山城主となる。
応仁元年	1467		応仁の乱
文明3年	1471		朝倉氏、一乗谷を本拠地とする。
文明6年	1474		甲斐氏、朝倉孝景と桜山に戦い、敗れる(日野川の合戦)。
永正3年	1506		朝倉氏の重臣・河合安芸守宗清、桜山城主となる。
天正元年	1573	河合氏	室町幕府が滅びる。 朝倉軍、織田信長軍と刀根坂に戦い、安芸守討死。桜山廢城。
天正2年	1574		一乗谷焼失、朝倉氏滅亡。 織田信長に反抗した一向一揆衆徒が桜山に拠って戦ったとも言われているが、定かではない。
天正18年	1590		豊臣秀吉が全国を統一する。

あとがき

範囲確認調査から数えて6次、8年におよぶ発掘調査の結果、礎石建物をはじめとする建物遺構が検出され、14世紀末から15世紀代にかけて存在していた館の全容が明らかになりつつある。大量な土師質皿の消費量や、輸入陶磁器、茶道具類、碁石などの出土品からは、歴代の主たちが宴会や茶会を催し、碁に興じていた光景が思い浮かぶ。居館跡の発掘調査は、「一ノ城戸」の土塁や堀などをはじめとした重要遺構の調査を今後も計画的に継続して行く予定あるが、同時に今後の史跡整備に向け袖山城跡全体について、史跡としての活用面や保存管理について十分検討していく必要がある。

今回『史跡 袖山城跡Ⅲ－居館跡発掘調査概要報告書－』を刊行するに至ったわけであるが、建物の詳細については今後まだまだ検討が必要であり、遺物の整理作業も途中段階にあるため、詳細な報告は断念せざるを得なかった。よって、詳細な報告は今後刊行する本報告書に譲ることにする。

最後になりましたが、夏の炎天下の日も冬の木枯らし吹く日も発掘作業に従事していただいた南越前市シルバー人材センターの作業員の方や、ご協力いただいた関係者の方々に厚くお礼申し上げます。



写真39 大猿の復元作業の様子



写真40 作業員集合写真